

---

# 凜として咲く花

秋桜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

凜として咲く花

### 【Nコード】

N8423Z

### 【作者名】

秋桜

### 【あらすじ】

3歳以前の記憶がない、田中伊織。

伊織の記憶の鍵は、「イオリ」と言うその名と首に下げられていた古い御守り。  
そして幼い伊織が見つけられた京都。

伊織が京都を訪れた時、運命は動き出す。

幕末へのタイムスリップ、新撰組との出会い  
そして伊織の記憶。

様々な事情が交錯する歴史ファンタジー！。

一番古い記憶にあるもの…。

周りが祭りで賑わっている風景。

そこで泣く幼い子どもの姿。

お囃子の音で泣き声が消され、誰も子どもの様子に気がつかない。  
子どもは心細く辺りをさ迷う。

ドンツと目の前の大人にぶつかり、子どもはその場で尻餅をついた。

「大丈夫かい？」

そう言ってぶつかった男性が、子どもを優しく抱き起こした。  
見れば子どもは目に涙を溜めている。

「ああ、どこか怪我でもしたのかい。」

その言葉を聞くと子どもはボロボロと涙を溢し始めた。

「どこかいたいのかい？」

いくら尋ねても子どもは首筋を振りながら泣くばかり。

困った男性は連れの女性に子どもを預ける。

女性は子どもに名前を訪ねた。

「僕、お名前は？」

「……い、伊織。」

子どもはしゃつくりをあげながら自分の名を伝える。

「伊織君かぁ。迷子かな？パパやママのお名前も教えて？」

「パパ…マ…マ…？」

子どもは首を傾げる。

まるで女性が何を話しているのか分からないといんんばかりに。

「…お父さんやお母さんは？」

その言葉に再び子どもは瞳に涙を溜めた。

「とおさま、かあさま、あにうえ…。どこお。」

男性と女性は顔を見合せた。

父様に母様？

今時の子どもにしては珍しい言葉遣いである。

「どこおー！」

わー、と子どもは泣く。

「怖いよおー。」

男性と女性は子どもを宥めながら家族と一緒に探した。

しかし結局見つける事ができず、子どもを警察へと預けた。

その頃になると子どもは泣き止んでいた。  
そして呟く。

「とおさまとかあさまって誰？あにうえって誰？」

子どもから自分の名前以外の記憶は全て失われていた。

「思い出せない、分らない…。ここはどこ？」

警察も子どもの両親は見つけることはできなかった。  
やがて子どもは施設へと入る。

これが田中伊織の覚えている一番初めの記憶である。

「伊織ー！早く起きなさい！」

柔らかな女性の声で目を覚ます。

ああ、夢か…。

そう思い再び布団を被り直す。

「伊織！京都へ行くのでしよう！」

がばりと布団から飛び起きた。

時計は8時まであと2分と針が迫っている。

「寝坊…。」

バタバタと慌ただしく階段をかけ降りた。

リビングに入ると呆れた顔をした女性がいる。

「おはようございます、久美さん。」

「おはよう伊織。あと2分遅ければたたき起こしていたわよ？」

伊織は急いで起きて良かったとホッとする。

「ご飯早く食べなさい。」

ああ、いけない。

のんびりとしている場合ではなかった。

伊織と久美のやり取りを聞いていた男性が、新聞を折り畳みゆっ

くり顔を上げた。

「伊織ゆつくりでいいよ。もしバスに乗り遅れたら車で送ってあげるよ。」

「本当ですか！ありがとうございます、真人さん。」

「ちょっと真人、甘やかさないで！」

「いいじゃないか。急ぐといいことなんてないよ。」

バスに間に合いますと怒る、でもどこか楽しそうな久美と真人の会話を聞き伊織はクスリと笑う。

自分は幸せだ。

あの時、施設に入った伊織を祭りで会っただけという理由で引き取ってくれたのだ。

そうして田中の姓を貰い、伊織と言う漢字をあてた名前をくれた。

関わったらもう他人事ではない。

そこ思うことが2人のいいところだ。



「伊織！ぼさつとしなーい。」

「はーい。」

「ほら興奮しないで、ね。」

伊織は出来立てのトーストを口に入れる。

バターをぬり忘れたため、ただサクサクした食パンの味しかない。

姉御肌の久美さん。

おっとりした真人さん。

子どものいない2人は自分を実の子のように育ててくれた。

ただ、絶対に『お母さん』『お父さん』とは呼ばせてくれない。

自分たちは本当の家族ではないから。

一線を引かれている。

本当の家族の元へ帰った時に本当の両親に言いなさいと言われた。

幼さ自分の言葉から両親と少なくとも兄が一人いることは間違いない。

それでも今は、彼らは自分の家族だと思っている。

伊織はパンの最後の一切れを牛乳で流し込むと伊織はリビングを後にした。

ここからは早い。

着替えながら歯を磨き、寝癖でクチャクチャの髪の毛をサツと手櫛で直すと準備完了。

「伊織、顔洗ってないでしょ？」

「あっ！」

スニーカーの紐を片方結んだところで思い出す。  
さすが真人さんはよく自分のことを見してくれる。

「伊織いいい！財布！」

「ああっ！」

バックの中を確認するとこれまた入ってない。  
玄関から家の中へ入ろうと足を踏み出す。  
だが次の瞬間、天地がひっくり返りボタンと大きな音がした。

「くっ…。」

足を滑らせ転倒。

「痛い。」

「んゝ、伊織やっぱり僕も一緒に京都へ行くのか？」

「あはは、大丈夫です…。」

付いてくると言い張る真人さんを宥め何とか京都へと着く。  
手には心配だからと真人さんの手書きの地図が握られている。  
やっぱり自分は幸せだ。

地図を頼りに宇治駅に近い久子さんと美喜男さんの家を目指す。  
彼らは久美さんの両親である。

久美さん同様、私を本当の孫と思って接してくれる。

「この道をまっすぐか…。」

家まであと少しになったとき、目の前に黒い影が映った。

「え？」

振り返ると、一匹のくね猫がいた。

「あ…ああ。」

自然と足が震える。

伊織は猫が苦手だ。

久美さんは自分の記憶の手がかりだと言っていたが正直よく分からない。

だが、今は苦手だけではない。

体のそこから沸き上がる言い様のない恐怖があった。

――ミ……タ――

――ア……ノム……メ――

何かが聞こえる？

その間にも黒猫と伊織との距離は徐々に小さくなる。  
猫が口をゆっくり開いた。

「伊織さん。」

自分の名前を呼ぶ声にはつとずる。

「久子さん！」

「真人さんが心配やさかい迎えに行ってくれへんかゆつて電話してきたさかいにな。」

「わざわざありがとうございます。」

もう、真人さんは過保護だな。

そう思いつつに後ろを振り返った。

そこには黒猫の姿はなく、何事もなかったかのように風が吹いているだけであった。

あれはいつたいなんだったのか？  
そんな疑問は一瞬にして消えた。

「よく来はった伊織。ゆつくりしてはってな。」

「ありがとうございます、美喜男さん。」

伊織は、やっぱり京都はいいなと思った。

京弁が心地よく耳に入ってくる。

まるで以前は生活の一部として聞いていたような錯覚さえ感じてしまう。

「このあとの予定はどないしはるん？」

久子の問いに伊織の肩がびくりとはねる。  
うまく受け答えしなければ…。

「京都はまず平等院の方へ行こうかと…。」

「明日は？」

「ええと…。」

伊織は口ごもるが、頭の中はフル稼働している。  
が、次の言葉が紡げない。

「特に決まってへんのなら明日はうちらと出かけるで。」

につこり微笑む久子。

出来れば全力で拒否したい。

「ええな？」

「…はい。」

最後の一言で伊織はしぶしぶ了承した。  
一緒に出かけることが嫌なわけではない。  
理由は別にある。

「なら明日の着物を選ばななあ。」

これが理由である。

「前は久子が見立てたものさかい、明日のはわしが選ぶで。」

「仕方ないなあ。」

うちが選びたかったなあと久子は残念そうに呟く。

この2人は伊織が遊びにくる度に着物を着せたがる。

2人は今では珍しく家も普段着も全て和に統一した純日本人のような人達である。

一方、2人の子ともである久美さんは着物をめったに着ない。

最近だと伊織の中学卒業式だろう。

元気の塊である久美には着物が窮屈で仕方がないらしい。

納得である。

そういうわけで娘にできなかったことを伊織で果たしているのだ。

伊織は着物を着ることが嫌ではない。

着物を着て外を歩くことで人目を集めることが嫌なのだ。

だが、観念するしかない。

あんなに嬉しそうな様子を見て断れるわけがない。

伊織は楽しそうな2人を残し、静かに部屋から退出した。

「さて、平等院に行きますか。」

早く行かないと本堂の拝観時間が過ぎてしまう。

少し足早に目的地へと向かった。

明日になり、もう少し2人の側にいれば良かったと後悔することも知らずに。



「何でかな…。」

次の日、伊織は袴を身を包んでいた。

「よお似合ってるなあ。」

美喜男さんは満足そうに言う。

「何でまた袴なんて…。」

「あらあ、いいやない伊織君。」

「久子さんからかわないでください。」

あえて『君』を強調する久子に伊織は口を尖らせる。

「さて、もう少ししたら行こうか。」

どこにとは聞かない。

いつもお茶会か観光地巡りだからである。

それよりも伊織は鞆をどうすればよいか悩んでいた。  
袴に今時のバックは似合わない。

かといって手ぶらは嫌である。

いっそ風呂敷にでもするか？

いやいや、完全に浮いてしまう。

悩んだ末、伊織は久子から和柄の鞆を借りた。

普通のバッグよりましである。

そもそも自分が何故袴姿にならなければいけないのだ？

そんな考えてもしょうもないことを思う。

「伊織、そろそろ行こか。」

久子が呼ぶ声により伊織は考えることを止めて玄関へ行く。

並べられた下駄へ足を通し外へと出た。

が、2人の姿はない。

久子さん、と呼ぶが返事はない。

おかしいなと思い家の中へ戻ろうとした時、伊織はビクリと肩を揺らした。

「ニャー。」

猫がいた。

黒い猫が一匹いた。

その目はギラギラと不気味な光りを放っている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8423z/>

---

凜として咲く花

2011年12月29日22時45分発行